

# 参院選で考えること

## 92参議院選挙に向けて

### 菅野(社会党)・内田(東京選挙区)・島袋(沖縄)を

七月二六日に行われる参議院議員選挙について、次の二点から注目し、運動への関与もしくは投票への基準とすることを訴える。



七月二六日に行われる参議院議員選挙について、次の二点から注目し、運動への関与もしくは投票への基準とすることを訴える。

第二は比例区でアイヌ人の菅野さんが、また沖縄選挙区で社会大衆党の島袋さんが立ったことである。日本国家が先住民を抑圧し、その版図を拡大していった歴史に対し、北と南から異議と主体の突出しが提起された。もちろん両者の運動の歴史の差異、また比例区と選挙区との違いなどがあるが、問われていることは同質である。日本人が先住民への抑圧、差別の過去と現在を反省し、少数民族が独自に生きていく権利と基盤を保障し、その持つ意味は大きい。この主張が今の日本人の中でどれほど受け入れられるのか率直に問わなければならない要素が大きい。最大の努力をしたい。比例区(社会党(菅野さん)、東京1内田さん、沖縄1島袋さん)への支持と、当選へ向け支援活動への参加を訴える。

## 今こそ日本帝国主義と闘う

### 反派兵・反戦反軍闘争を!!

「六・一五」……この日は、六〇年安保闘争のメモリアルデーから、日本帝国主義の掛け値なしの侵略反革命戦争への里程碑として新たに記憶されねばならないだろう。

一九九二年六月一日午後八時三十分、衆議院本会議において自公三党の賛成多数でPKO法案(及び国際緊急援助隊派遣法一部改正)が可決・成立した。社会党、社民連は本会議をボイコットした。残念ながら大多数の「国民」は牛歩戦術や議員辞職を冷やかな眼で見ている。反対運動は盛り上がり欠けたまま、反戦平和や護憲の拡散と同時に反戦反軍反安保闘争の衰弱がこの歴史的転換の中で露呈した。我々もまた自らの無力感に打ちひしがれるを得ない。

PKOをめぐる「朝日新聞」の論調に典型的に現れているが、冷戦構造の

## MR研究会 第三回 公開フォーラムのご案内

ネオ・コーポラティズムと労働政治  
「連合」の政策・制度参加路線を中心に

講師/篠田 徹さん(早稲田大学教授) 一世紀末の労働運動  
日時/7月11日(土) 午後二時~六時  
会場/中央区新富区民会館 (静岡法経短大教員)

初、連合型選挙ということによって強行されたPKO法案への賛否一国民投票的性格を持つ点である。この点で特に注目すべきは東京選挙区である。当選した内田さんは花岡事件の弁護士を長く務め、また集会への警察の検問弾圧に対し、いつも先頭で体を張ってきた人であり、我々は全面的に支持し、かつ支援の運動への参加を訴える。PKO法案賛成反対かを問う、さらに日本のアジアに対する戦争一戦後責任が国政選挙という場で全面的にクローズアップされた意義は極めて大きい。また社会党中央本部の締め付けに対し国会、都議会の議員をはじめ自治労働者職労などがこれまでこれを打ち破り、反PKOの意思を貫くのかも大いに興味を湧かせる点である。国会の最終局面で牛歩でがんばったと自認しているだけでは政治とはいえない。田辺執行部

や「政変再編」をめぐる動向も含めて、今のような活動を進めているのか?

ネオ・コーポラティズム論と労働政治の視点から、「連合」の政策・制度参加路線を分析している篠田さんに、日本の労働政治の事情について報告してもらい議論する。

「変化の性格尺度が今までと違う。我々の世界観の外側で生起している」この分析は小倉利丸の視座と交叉して、下田平さんもちょうとふれたように「女性、若者、子供、消費」総じて労働力の再生産過程がキー概念となってくる。おなじみである小倉から引いておこ「70年代以降の資本主義はポスト国産資本あるいは情報資本主義」「情報サービス化の進展は、資本と国家が社会的労働者の労働管理を社会的工場としての家族一学校一地域一工場において展開しなければ、社会的資本蓄積そのものが破綻せざるを得ない瀬戸際へ自ら追い詰めた点で、決定的に以前と異なる。」

「変化する性格尺度が今までと違う。我々の世界観の外側で生起している」この分析は小倉利丸の視座と交叉して、下田平さんもちょうとふれたように「女性、若者、子供、消費」総じて労働力の再生産過程がキー概念となってくる。おなじみである小倉から引いておこ「70年代以降の資本主義はポスト国産資本あるいは情報資本主義」「情報サービス化の進展は、資本と国家が社会的労働者の労働管理を社会的工場としての家族一学校一地域一工場において展開しなければ、社会的資本蓄積そのものが破綻せざるを得ない瀬戸際へ自ら追い詰めた点で、決定的に以前と異なる。」

## 第二回MR研フォーラムに参加して

馬頭で反PKOのピラをまいたという話だが、いわゆるビジネスマン風の中年男性はまったくピラをうけとらないという。今更と言われるかもしれないが、選挙の電話依頼で遭遇する男性達からはそれほど拒絶的、あるいは保守的という印象は受けなかった。

6月のMR研公開フォーラムで講演された下田平裕身さんは次のように書いている。「その変革(企業社会の)がない限り、境界として極めて緊張した場な

労働者は企業社会の構成員である(労働者)ではないのである。労働者でない限り、企業社会を媒介して容易に日本経済と日本国家防衛のための「聖戦」に統合されて行くだろう(「労働組合」一「二流組織」による労働者支配)

現代は、労働者という像さえ薄れ消えかけているのであろうか。(ピラの話に戻るが、馬頭と呼ばれる組織との対決であらう。その背後に「企業社

「変化の性格尺度が今までと違う。我々の世界観の外側で生起している」この分析は小倉利丸の視座と交叉して、下田平さんもちょうとふれたように「女性、若者、子供、消費」総じて労働力の再生産過程がキー概念となってくる。おなじみである小倉から引いておこ「70年代以降の資本主義はポスト国産資本あるいは情報資本主義」「情報サービス化の進展は、資本と国家が社会的労働者の労働管理を社会的工場としての家族一学校一地域一工場において展開しなければ、社会的資本蓄積そのものが破綻せざるを得ない瀬戸際へ自ら追い詰めた点で、決定的に以前と異なる。」

「変化の性格尺度が今までと違う。我々の世界観の外側で生起している」この分析は小倉利丸の視座と交叉して、下田平さんもちょうとふれたように「女性、若者、子供、消費」総じて労働力の再生産過程がキー概念となってくる。おなじみである小倉から引いておこ「70年代以降の資本主義はポスト国産資本あるいは情報資本主義」「情報サービス化の進展は、資本と国家が社会的労働者の労働管理を社会的工場としての家族一学校一地域一工場において展開しなければ、社会的資本蓄積そのものが破綻せざるを得ない瀬戸際へ自ら追い詰めた点で、決定的に以前と異なる。」

宮田 明